

べと病強耐病性の「晴黄」シリーズに2品種仲間入り!

タキイ交配 黄芯系ハクサイ

晴 はれ 晴 はれ

黄 ぎ 黄 ぎ

90 85

年内〜冬どりの
中生種!

冬〜厳寒期どりの
中晩生種!

タキイ研究農場

千葉

潤一

2005〜2006年の寒い冬とは打って変わり暖冬となった本年の冬、世間で騒がれている「地球温暖化」の影響が各産地を直撃しました。気象条件が年によって変動することは当然ですが、ここ数年はその振幅が非常に大きくなり、ハクサイに限らず栽培が不安定になりがちです。

このような状況の中、安定した作柄と収益を確保するためには、栽培技術はもちろん、品種の持つ特長や耐病性を生かして、目的作型に最も適した品種を選択することが、今まで以上に重要になります。

タキイ研究農場では、一般地から暖地における年内〜冬どりの主力品種「黄こころ85」「黄こころ90」の肥大性、耐寒性、べと病耐病性などを改良することで、さらなる栽培安定性を実現すべく育

成を進めてきました。

主要産地における試作では、育種目標であるべと病耐病性、肥大性、耐寒性はもちろん、品質、食味の点でも高い評価を得ました。

晴黄85の品種特性

1 べと病耐病性に優れる

現在、各産地で問題となっているべと病に対して特に強い耐病性を有し、葉べと・肋べとともほとんど発生は見られないので、安心して栽培できます。「黄こころ」シリーズに続き、「晴黄60」からスタートした「晴黄」シリーズは、べと病に対する安定した耐病性が大きな特長になります。

2 生理障害の発生が少ない

「黄こころ85」と同様に石灰欠乏症（縁腐れ・芯腐れ）などの生理障害の発生が少なく、草勢旺盛で栽培が容易な85日型の中生種です。

3 低温結球性に優れ、播種期幅が広い

低温結球性と耐寒性に優れるため、中間地の8月下旬〜9月上旬まき、暖地の9月上中旬までと播種期幅が広く、安定した栽培が可能です。

4 品質・食味が良好

球姿は尻張り・胴張りのよい円筒形で、玉肥大に優れます。球内色は鮮黄色で葉質がやわらかく、甘み・うまみに富み食味良好です。

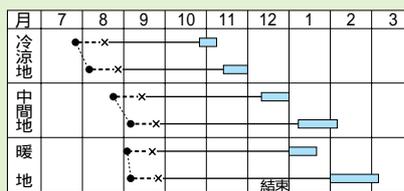
「晴黄85」の適作型

「晴黄85」は特に低温結球性に優れるので、遅まきでの不結球の心配が少なく、播種期の幅が広く設定できます。



「晴黄90」の適作型

「晴黄90」は耐寒性に優れている反面、低温結球性がやや劣るので、播種適期を厳守するとともに、若苗定植で初期生育を順調に進め、根張りのよい強健な株作りを心掛けてください。





べと病に耐病性を持ち、生理障害の発生が少ない中生種の「晴黄85」。



中晩生種「晴黄90」の球色は濃緑色で、べと病はもちろん、耐寒性、晩抽性に優れる。

「晴黄90」の品種特性

1 ベと病耐病性に優れる

「晴黄85」と同じように、特にべと病に対して強い耐病性を有しており、葉べと・肋べとともほとんど発生は見られないので、安心して栽培できます。

2 耐寒性・晩抽性に優れる

耐寒性に優れます。球色が濃緑色のため、厳寒期でも色あせが少なく、商品性に優れます。また、

「黄ごころ90」よりもさらに晩抽性が安定しており、球内の芯伸びが遅いため、在圃性に優れています。

3 生理障害に強い

石灰欠乏症（縁腐れ・芯腐れ）やゴマ症などの生理障害の発生が少なく、栽培が容易な90日型の中晩生種です。

4 草姿立性で管理作業が容易

外葉は強健で立性のため、追肥・薬剤散布の作業が容易なうえ、結束作業性にも優れています。

栽培のポイント

■ 作物特性に基づいた栽培管理

ハクサイの根は細くて弱く、しかも再生力が強くないため、本来直まき性の強い作物です。一部の産地では、現在もなお直まき栽培が行われています。

管理作業の効率化や育苗技術の向上によって産地の多くは移植栽培が行われていますが、前述のようなハクサイの特性を基本に、深く広い根群を確保することを念頭に育苗・栽培管理を行うことが上作のための大きなポイントになります。



2回の追肥を基本に、生育全般にわたって肥効を持続させる。



葉質がやわらかく食味良好な「晴黄85」は年内～冬どりの多収穫。

育苗管理

秋冬ハクサイでは、育苗日数15～20日、本葉4枚程度が定植適期苗です。プラグトレイを用いた育苗では、トレイの中で根巻きしているような老化苗の定植は、活着の遅れや根量不足を招き、肥大不足や芯腐れなどの生理障害の原因になるので注意します。

特に、冬どり栽培では定植後の気温の低下が急激で、老化苗の定植による影響が大きいため、年内どり栽培以上に若苗定植を心掛けます。

育苗後半は軟弱徒長を防止するため、しっかりと外気に当てて順化を行い、がっちりとした苗に仕立て、定植後の活着や初期生育を促進します。

追肥型の肥培管理

年内～冬どりの作型といえども、温暖化現象により、以前よりも気象条件はマイルドになっていきます。従来通りの施肥設計では、定植直後より生育が過度となって旺盛になり、外葉がですぎて株がやわらかく仕上がります。また、病害が発生しやすくなり、収穫期におけるゴマ症や芯腐れの発生を助長することにもなります。

対策として、従来よりも元肥をやや少なめにし、追肥を2～3回に分施することで、生育全般にわたって肥効を持続させます。2回の追肥を基本として、1回目は定植後10日ごろに株元へ、2回目は定植後30日目ごろまでに畝間に施し、根を傷めないように管理機で中耕・培土します。その後は生育の状況に応じて施しますが、1月下旬から2月の厳寒期収穫をねらうには、耐寒性を高め

る意味で年内にもう一度追肥すると効果的です。

生理障害対策

近年、各種病害以上に問題となっている縁腐れ・芯腐れなどの石灰欠乏症やゴマ症などの生理障害は、土壌中の要素欠乏が直接の発生要因となることは実は少ないのです。むしろ過湿や老化苗定植などによる根張り不足や根傷み、結球期前後の極端な乾燥や多肥栽培による要素の吸収阻害などが主な原因となっています。

施肥設計の見直しを行うと同時に、深耕や有機物の施用による土壌物理性の改善を積極的に行うことで、生理障害の発生を軽減するように努めてください。

「黄ごころ」シリーズとの使い分け

「晴黄85」は「黄ごころ85」に比べ、同様の品質を持ちながら耐寒性と晩抽性に優れているので、良質中生種としては収穫の終了を遅く設定することができま。

また「晴黄90」は「黄ごころ90」と比較して、晩抽性と肥大性が優れているので、圃場での貯蔵性が高まり、在圃性に優れます。「晴黄85」「晴黄90」を使用することで、安定した収穫が従来よりも長い期間にわたって期待できます。

ただし、両品種とも耐寒性を高めるために草勢がやや強くなっています。適切な肥培管理で外葉の過剰生育を抑え、密植適性・結実作業性を高めることが肝要です。そのため、各産地の栽培体系に合わせた品種選択が必要です。